

明治 22 年(1889)・26 年(1893)紀伊半島災害による和歌山県南部の被災者の北海道旭川西永山兵村、愛別町金富農場への集団移住

一般財団法人 砂防フロンティア整備推進機構 井上 公夫

1. はじめに

明治 22 年(1889)8 月の紀伊半島水害で激甚な被害を受けた奈良県十津川村の被災民のうち、640 戸 2661 人も被災民が 2 ヶ月後に北海道新十津川村へ集団移住した。厳冬期直前であったため、春までに 70 人も亡くなった。翌年の春に新十津川村が設立され、被災民は新十津川村に入植、新しい村づくりを始めた。そのうち 95 戸は、滝川兵村の屯田兵に応募(士族対応)した。

奈良県十津川流域以上に多くの犠牲者が出た和歌山県南部地域では、2 年後の明治 24 年(1891)に北海道に集団移住した。旭川市永山町史編集委員会(1962)、愛別町郷土史研究会(1991)、上原(1914)、遠藤(2006)、桑原(1980, 1981, 1999)などをもとに、整理した結果を報告する。

2. 明治 22 年(1889)紀伊半島災害の和歌山県側の災害状況

図 1 は、1889 年紀伊半島災害による和歌山県、奈良県における死者数を示している(水山ほか, 2011)。奈良県十津川流域だけでなく、和歌山県の南部では十津川流域以上に激甚な被害が発生した。

図 2 は、富田川流域の氾濫範囲(国土交通省近畿地方整備局大規模土砂災害対策技術センター, 2021 ; 井上, 2022)で、富貴建男氏の資料をもとに、明治 44 年(1911)測図の国土地理院 1/5 万旧版地形図「田辺」を使用して、作成された図である。

明治 22 年(1889)8 月 18 日～20 日、上富田町は大災害に見舞われた。台風による集中豪雨により、河川の大氾濫や多くの山崩れを引き起こし、河川沿いの集落や耕地に壊滅的な打撃を与えた。富田川筋では、上富田町(現田辺市)岩崎と白浜町保呂間の狭隘部(図 2 左下の○地点)が井堰のようになり、その上流部は大きな泥海となった。

生馬川の上流部では、大規模崩壊によって天然ダムが形成された。4 年後の豪雨で決壊し、下流域に甚大な被害を与えた。

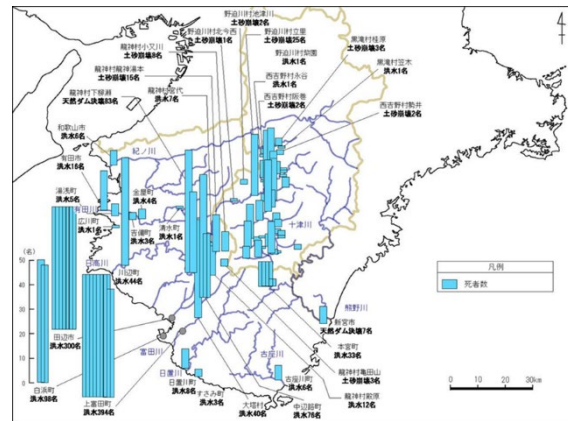


図 1 1889 年紀伊半島災害による和歌山県と奈良県における死者数(水山ほか, 2011)

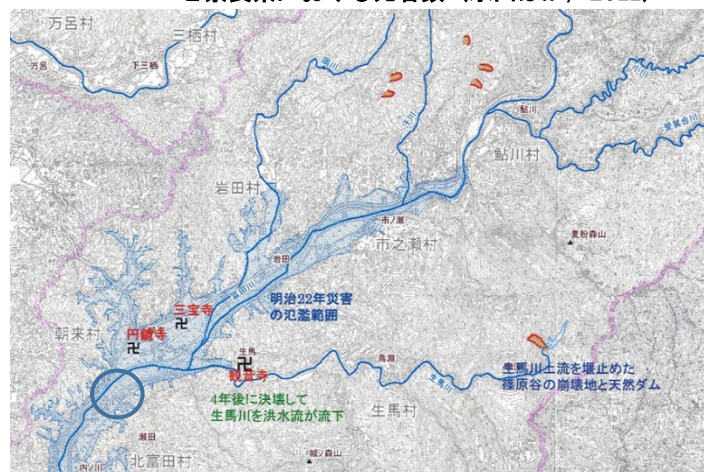


図 2 富田川流域の氾濫範囲(国土交通省大規模土砂災害対策技術センター, 2021 ; 井上, 2023)

3. 屯田兵として集団移住

明治 23 年(1890)12 月に北海道屯田兵(歩騎砲工兵)徴募の旨が和歌山県知事より西牟婁郡長へ、郡長より各村長に通知された。下秋津村の目良謙吉・謙蔵家族など 39 家族が、和歌山県田辺地域から北海道西永山

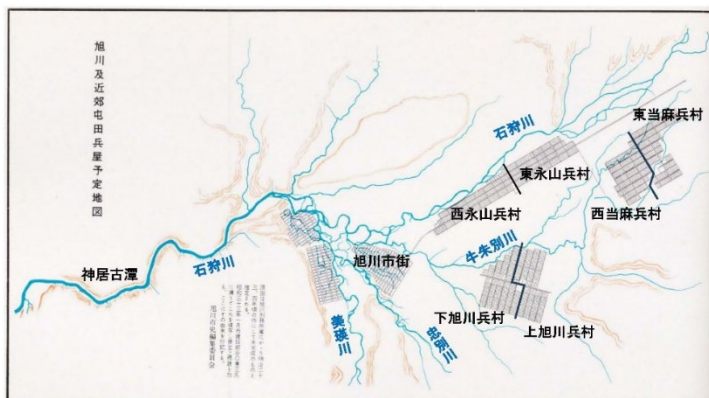


図 3 旭川及近郊屯田兵屋予定地図 (旭川市永山町史編集委員会, 1962, 井上,2023)

兵村に入植した(図 3)。「目良謙吉入地紀行」(桑原, 1980)に和歌山南部から北

海道石狩川上流の西永山兵村に集団移住した経緯が詳しく説明されている。

4. 和歌山県南部の被災者の北海道・^{かなとみ}金富農場への移住

富田川流域の岩田村の初代村長であった山本萬作は、明治 22 年(1889)の紀伊半島水害で激甚な被害を蒙りながら、村の復旧に努力した。しかし、1 年後に岩田村の村長を退職し、1 年半ほど市ノ瀬村の村長を務め、さらに西牟婁郡の土木技師になった。明治 26 年(1893)8 月 18 日、富田川流域は再び大水害に見舞われた。明治 27 年(1894)当時 36 歳の山本萬作は北海道移住を志し、和歌山県庁の認可を取った。実情視察のため、単身で札幌に行き、道庁を訪ね、開拓の進捗状況や今後の見通しについて調べた。田辺町の有力者、近藤新十郎と岡本庄太郎は北海道開拓に深い関心を寄せ、明治 27 年(1894)5 月北海道に行き、北海道の気候や土質を調査した。3 人で現地視察をしたのち、11 月に未開地 105 万坪(350 町歩, 347 万 m²)の貸下げを出願し、許可を得た。こうして、旭川からさらに石狩川上流の愛別町金富農場で農場経営を始めた。

図 4 は石狩川と愛別川に挟まれた沖積低地で、平坦地の大部分が愛別農場の範囲である。当時の金富地区は老樹大木が繁茂し、狐や狸の棲家で鰲が騒ぎまわっていた。明治 28 年(1895)に 70 戸の入殖があり、北一号線路(北見道路)沿いに村役場(当時は鷹栖村)や村医住宅や 2~3 軒の飲食店も建設された。しかし、明治 31

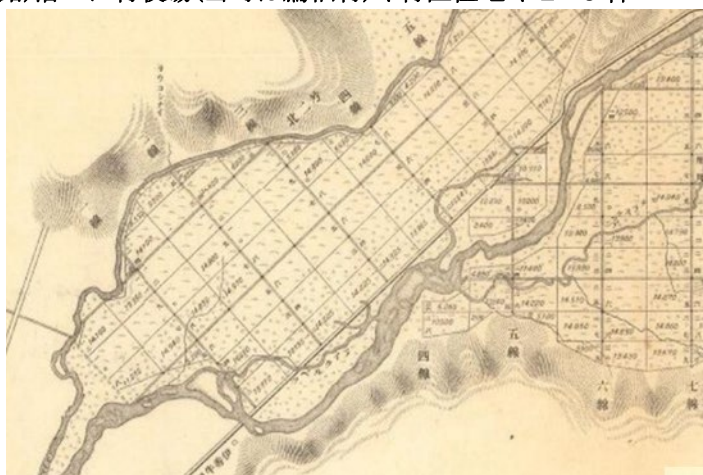


図 4 石狩國上川郡アイベツ原野區畫圖 第貳 (石狩川と愛別川合流点付近) 北海道立図書館北方資料デジタルライブラリー

年(1898)9 月の豪雨で、全道的な大洪水があり、石狩川と愛別川も大氾濫した。村役場は流失寸前の大きな被害となった。石狩川などの氾濫を恐れて、役場や商店などは東側山裾の現在地(当時は番外地)に移転した。極寒の地であるが、金富農場は次第に開墾が進んだ。愛別町教育委員会(1991)『アイベツ故郷ものがたり』などに、艱難辛苦のもと 100 年に渡る子孫の暮らしの様子が描かれている。